

まことに、主なる神に救いがあるのです

今日、わたしは聖書日課の内容に従って、真の自由はどういうものであるかについて皆さんとともに分かち合いたいと思います。

しかし、今日ご一緒に読んだコリント書には、ややもすれば誤解しやすい内容があります。なので、まずこれについての説明をさせていただきます。

使徒パウロが活動していた当時、ローマ人は割礼を受けた人を障碍者のように思っていました。それゆえ、割礼を受けた信仰者の中には、ローマ人のことをとても気にして、割礼を受けていないかのようにする手術を受けたりもしました。また一方で、割礼を受けた信仰者たちは割礼を受けていない信仰者たちに対して自分たちの方が優越であるという素振りを見せることもありました。彼らは、「神様のみ旨とみ業」を考えることよりも、「よその人の評判」を大切に思っていたのです。それで使徒パウロは信仰者たちに、「大切なのは…割礼の有無は問題ではなく…神の掟を守ることです。」(1コリント7:19)と強調しました。信仰者は、神様のみ言葉に忠実に従う時に自由が得られるということを教えてくれたのです。

またコリントの教会には他にも似たような問題がありました。当時の教会では奴隷主、自由人、奴隷が共に信仰生活をしていました。しかし、奴隷主、自由人、奴隷の間には微妙な葛藤がありました。それだけでなく、奴隷主や自由人もお互いに誇示し威勢を振るいあうこともありました。そこで使徒パウロは、「おごり高ぶる、誇示、物欲などに陥るのは『情欲の奴隷』となることである」と指摘したのです。そして、「信仰者たちはキリストにあって兄弟である」ということを教えるために、「主によって召された自由な身分の者は、キリストの奴隷なのです。あなたがたは、身代金を払って買い取られたのです。」(1コリント7:23)と強調しました。わたしたちは、神様にあって兄弟であるという意識を持って生きていく時、真の自由人になれるということです。

当時の信仰者の力で奴隷制度をなくすことはできなかったのでしょうか。それで、使徒パウロはこのような現実を超えられる信仰を持つことを勧めていました。それは、たとえ奴隷として生きなければならないとしても、自由を享受する新しいあり方でした。ほかでもないキリストにあっての自由です。そして、これは奴隷制に関する問題だけでなく、私たちが生きる世の中で、自由を縛り付けるすべての現実を乗り越える力にもなるのです。考えてみれば、誰にでも自由を縛る束縛から容易に抜け出せない場合があるものです。そのような時現実をそのまま受け入れることも必要です。そして、その束縛の現実の中で、真

に価値のある自由を追い求めることも知恵であるのです。それはまさにキリストにあって享受する自由です。

今日ご一緒に読んだ福音書には、イエス様がガリラヤで福音を宣べ伝え、最初の弟子としてシモンとアンドレ、そしてヤコブとヨハネに呼びかける場面が記されています。さて、これらの最初の弟子たちは何を願って弟子になったのでしょうか。それは確かに救いの人生を願ったのでした。けれども一方でこれは、真の自由を求めることでもあるとも言えるでしょう。

イエス様は「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ1:15)と宣べ伝えました。このみ言葉に従って彼らと私たちは弟子になりました。ところで、この神の国とはどういうものなのでしょうか。それは、この世の中が神様のみ言葉によって治められることです。すなわち、すべての人が神様のみ言葉によって考え、み言葉によって働き、み言葉によって生きていく世界になることです。そしてもう一方で、人々が神様のみ言葉によって自由を得られるようになることでもあります。

イエス様の初めての弟子たちは皆漁師でした。聖書には、イエス様の「わたしについて来なさい」(マルコ1:17)という一言に従って「シモンとアンドレはすぐに網を捨てて従い、ヤコブとヨハネは父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った。」(マルコ1:18、20)と記されています。彼らは自分の職業さえ諦めたのです。これは、弟子たちにとって救いと真の自由に対する希望がどれほど大きかったのかを教えてくれる象徴的な行為です。

イエス様の弟子たちだけでなくすべての人々は自由を願っています。わたしたちも自由を願っております。けれども、その自由というものはなかなか人の手に入れられません。数多くの哲学者と社会学者が自由について研究しましたが、自由が何なのか一言で言うのは難しいです。けれども信仰者は自由について断言することができます。それは、神様において、神様のみ力に頼って生きていくことです。当時のコリントの教会では、奴隷の身分では自由ではないと思い、奴隷の身分から抜け出すことだけに執着した人もいました。そして、いざ自分が自由の身分になると、他の奴隷に対してむやみに振舞うこともありました。そのような人を真の自由人であると言えるのでしょうか。真の自由人とは、自分が奴隷であろうと自由人であろうと身分に関係なく、神様において、神様のみ力に頼って生きていくものになることです。

今日ご一緒に読んだエレミヤ書はまた自由についての別のお話でもあります。当時、イスラエルの民らは偶像崇拝に溺れていました。彼らがなぜ偶像崇拝をしたのでしょうか。人々は偶像崇拝とは、木、石、金属などをもって神様の形を作り、拝むことであると思っています。けれども、偶像崇拝はそれだけではありません。偶像崇拝は、神様ではないことを神様のように思うすべてのことです。そして偶像崇拝には人間の欲望がそのまま反映

されていますし、偶像は人間の欲望を象ったものです。偶像崇拜の対象であったバアルは、多産と豊穡の神と呼ばれました。それを通してバアル崇拜は物質的な欲望を満たすためのものであるということが分かります。それゆえ、使徒パウロは「貪欲な者、つまり、偶像礼拝者は、キリストと神との国を受け継ぐことはできません」(エフェ5:5)と指摘したのです。ですから、もし財産、名誉、権力のようなものに執着すると、それも偶像崇拜になるのです。偶像崇拜は偶像の奴隷、欲望の奴隷になることです。真の自由は、ひたすら神様にあります。

今日ご一緒に読んだエレミヤ書には「まことに、我々の主なる神にイスラエルの救いがあるのです」(エレ3:23b)と記されています。そして「わたしのもとに立ち帰れ。…そうすれば、再び迷い出ることはない」(エレ4:1)とも記されています。このみ言葉はほかでもなく、「真の自由は神様にある」ということを教えてくれるみ言葉です。そして、「朝の礼拝」の時、「完全な自由は主に使えることにあります」とも告白します。

わたしは若い時、監獄で1年を過ごしたことがありました。監獄はわずか1.2坪の空間であり、24時間監視され、他の人と話し合うことも禁止されていました。運動時間も一日にわずか15分でした。シャワーも1週間に1度ぐらいしか許されていませんでした。このような扱いは独裁政権が自分に抵抗した人を屈服させる意図によるものでした。私は、初めはそのような不当な扱いに抵抗しました。けれどもすぐ監獄のなかで抵抗することがいかに無力であるかを悟りました。しかし、ある瞬間から自由を感じるようになりました。それは、私が屈服したからではありませんでした。現実を避けたからでもありませんでした。それはわたしが、聖書を読んだりお祈りをしたりしながら神様に会える自由を見つけたからでした。使徒パウロも、「自分は監獄の中に閉じ込められていながらも自由人である」と告白しました。それは、神様を通して、神様にあって得た自由です。わたしにとっても同じでした。たとえ、独裁政権がわたしの体を閉じ込めることはできるとしても、私の魂まで閉じ込めることはできませんでした。わたしはその時、聖書を読んだりお祈りをしたりしながら私の一生のなかでもっとも大事なイエス様に深く出会うことができました。

コロナ禍が長期化するにつれて、多くの人々は自粛生活にかなり疲れています。感染に対する緊張と不安、経済的な困難、生活の不自由と不便さが重なり、苦しみを感じる人々がとても多くなりました。改めて自由の大切さを話したりもします。しかし、そのような自由の大切さについて言えば、体の自由に限らないのです。私は、このような状況のなかで「さらに大事なのは魂の自由である」と思います。なので、たとえ不自由な現実であるとしても、これをきっかけにして、魂の自由のための道を求めることをお勧めいたします。誰が何と言っても、信仰者にとって真の自由は、神様にあって、神様によって成し遂げられる自由です。私は、このようなコロナ禍が神様にさらに深く出会うことができる良い機会であると思います。

コロナ禍にも、神様は私たちのためにお働きになっておられます。そしてきっと、神様がエジプトで奴隷生活をしていたイスラエルの民らを救い出してくださったように、バビロンで捕虜生活をしていた民らをイスラエルの土地に帰らせてくださったように、このコロナ禍から私たちを解放し、真の自由を与えてくださるでしょう。ですから、神様はご自分の民らになさったすべての約束を成し遂げる準備をしておられるという信仰をもって、この試練を共に乗り越えていきましょう。神様は平和と自由と回復の源であります。

この一週も信仰によって神様が与えてくださる自由を得、その自由を通してこの困難をともに乗り越えていける日々になりますように心よりお祈りいたします。